

1 | 映画館での上映

3

諸外国との比較 [2022]

※各国のデータについては、以下を参照した。

『映画年鑑2024』
「統計編 世界主要各国映画諸統計」(キネマ旬報社刊)

フランス
フランス国立映画センター
Centre National du Cinema et de l'Image Animee (CNC)
“Bilan du CNC”
<https://www.cnc.fr/professionnels/etudes-et-rapports/bilans>

イギリス
英国映画協会
British Film Institute (BFI) “Statistical Yearbook”
<https://www.bfi.org.uk/industry-data-insights/statistical-yearbook>

ドイツ
ドイツ映画振興協会
Filmförderungsanstalt (FFA) “FFA Info”
<http://www.ffa.de/studien-und-publikationen.html>

オーストラリア
スクリーン・オーストラリア
Screen Australia “Fact Finders”
<https://www.screenaustralia.gov.au/fact-finders/>

韓国
韓国映画振興委員会 영화진흥위원회 (KOFIC)
「韓国映画産業決算」
<https://www.kofic.or.kr/kofic/business/rsch/findPolicyList.do>

“Focus2023 – World film market trends”
第76回カンヌ国際映画祭フィルムマーケット配布資料

2024年1月末現在、まだ、諸外国の2023年のデータはネット上に公開されていないため、以下では、2022年の日本と諸外国(アメリカ・カナダ、フランス、イギリス、ドイツ、韓国、オーストラリア)のデータを比較している。2020-2022年はいずれの国もコロナの影響下にあった。

観客数

2020年以降、2023年5月8日に新型コロナウイルス感染症が「第5類感染症」に位置づけられるまで、日本の映画産業はコロナ禍で大きな打撃を受け続けてきた。他の国々も同様だったが、そのダメージは日本をはるかにしのぐものであり、回復にも時間がかかっている。2022年、日本の観客数は1億5200万5000人で、10年前(2013年)と同じ水準まで回復したが、他の国々では50-80%の水準にとどまっている。

とはいうものの、ニューヨークの映画館が

2020年3月から2021年春までほぼ1年間休館し、フランスでは2020年3月から2021年5月半ばまで断続的に閉館・再開が繰り返されるというような壊滅的な状態からは脱け出し、2013年比でフランスでは78%、イギリスとオーストラリアが71%、ドイツは60%まで回復している。アメリカ・カナダと韓国では観客の回復に時間がかかっており、2013年比53%にとどまっている。

観客数を人口で割った国民1人当たりの年間鑑賞本数は、韓国が2.2本(←4.2)、アメリカ・カナダ1.9本(←3.8)、フランス2.3本(←3.0)、オーストラリア2.2本(←3.5)、イギリスは1.9本(←2.6)となっている。日本人の年間鑑賞本数は2020年0.8本、2021年0.9本から着実に回復して2022年は1.2本となったが、他国に比べると元々鑑賞本数が少なく、ドイツと最下位を争っている。

→ [fig.17, 18](#)

映画館数・スクリーン数

いずれの国も、シネマ・コンプレックスの増加を背景に2019年まではスクリーン数は増加を続けていたが、2020年は減少に転じ(フランスと日本のみ微増)、コロナ禍の影響が懸念されたが、2021年、アメリカ・カナダとイギリス以外の国ではスクリーン数は微増、2022年はイギリスは微増となるが、アメリカ・カナダとオーストラリア、ドイツではスクリーン数が減少している。とはいえ、いずれの国でも、2022年までは極端な減少はみられない。

すべての国において、様々な形で映画館を守るための公的な支援策がこじられ、日本において、ミニシアター・エイド基金やSAVE the CINEMAといった、映画館を応援し、映画館や上映者に対する公的な支援を求める動きが生まれたように、諸外国においても、映画人や映画ファンが映画館にエールを送る活動が行われ、映画館自身も存続のための様々な試みを行ってきたことなどにより、コロナ禍による閉館は小規模なものにとどまっていると思われる。

2022年のスクリーン数は、アメリカ・カナダが4万2063スクリーンと他の国に比べて圧倒的に多く、次いでフランスが6298、ドイツ4911、イギリス4720スクリーンが続く。ほとんどの国が10年前2013年よりもスクリーン数が増えている。特に韓国では2184スクリーンから3322スクリーンと10年間で1.5倍に増えている。

人口をスクリーン数で割った「1スクリーン当たりの人口」は、その数値が低いほどスクリーンが多い、身近にスクリーンが存在しているとみることができる。この数値をみると、日本は34,585人に1スクリーンと、他の国に比べてスクリーンが極端に少ない。アメリカ・カナダは8849人に1スクリーン、フランスは10,420人に1スクリーンで、日本以外の7ヶ国はいずれも1スクリーン当たりの人口は1万人台におさまっており、日本のスクリーン数は、アメリカ・カナダの4分の1、フランスの3分の1、韓国やドイツの2分の1程度しかない状態である。

→ [fig.19, 20, 21](#)

fig.17
諸外国との比較
[観客数]
(2013-2022)

	アメリカ・カナダ*	フランス	ドイツ	イギリス	韓国	オーストラリア	日本
人口(2022)	372,217	68,305	84,080	60,238	51,628	26,268	124,947
2013	1,340,000	193,700	129,700	165,500	213,350	82,000	155,888
2014	1,270,000	209,100	121,700	157,500	215,060	78,600	161,116
2015	1,320,000	205,400	139,200	171,900	217,290	90,300	166,630
2016	1,320,000	213,200	121,100	168,300	217,020	91,300	180,189
2017	1,240,000	209,400	122,300	170,600	219,870	85,000	174,483
2018	1,300,000	201,200	105,400	177,000	216,390	89,800	169,210
2019	1,240,000	213,200	118,600	176,100	226,680	84,700	194,910
2020	240,000	65,300	38,100	44,000	59,520	28,200	106,137
2021	470,000	95,500	42,100	74,000	60,528	39,700	114,818
2022	715,100	152,000	78,000	117,300	112,805	57,900	152,005
2013→2022の変化	53%	78%	60%	71%	53%	71%	98%
2019→2022の変化	58%	71%	66%	67%	50%	68%	78%

単位:千人

fig.18
諸外国との比較
[年間鑑賞本数]
(2013-2022)

	アメリカ・カナダ*	フランス	ドイツ	イギリス	韓国	オーストラリア	日本
2013	3.8	3.0	1.6	2.6	4.2	3.5	1.2
2014	3.6	3.3	1.5	2.4	4.2	3.4	1.3
2015	3.7	3.2	1.7	2.6	4.3	3.8	1.3
2016	3.7	3.3	1.5	2.6	4.2	3.7	1.4
2017	3.4	3.2	1.5	2.6	4.3	3.4	1.4
2018	3.6	3.1	1.3	2.7	4.2	3.6	1.3
2019	3.4	3.3	1.4	2.6	4.4	3.3	1.5
2020	0.6	1.0	0.5	0.7	1.1	1.1	0.8
2021	1.3	1.5	0.5	1.1	1.2	1.6	0.9
2022	1.9	2.3	0.9	1.9	2.2	2.2	1.2

*アメリカ映画協会 (Motion Picture Association of America, MPAA) は、観客数について、アメリカとカナダをあわせた数値を公表している。

fig.19
諸外国との比較
[スクリーン数]
(2013-2022)

	アメリカ・カナダ	フランス	ドイツ	イギリス*	イギリス(旧)	韓国	オーストラリア	日本
2013	43,055	5,588	4,610	-	3,867	2,184	2,057	3,318
2014	43,392	5,647	4,637	-	3,909	2,281	2,041	3,364
2015	43,288	5,741	4,692	-	4,046	2,424	2,080	3,437
2016	43,310	5,842	4,739	4,327	4,150	2,575	2,121	3,476
2017	43,500	5,913	4,803	4,512	4,264	2,766	2,210	3,530
2018	43,979	5,983	4,849	4,640	4,340	2,937	2,278	3,591
2019	44,283	6,114	4,961	4,782	4,480	3,079	2,310	3,627
2020	44,111	6,127	4,926	4,682	-	3,015	2,229	3,669
2021	43,646	6,193	4,931	4,610	-	3,254	2,290	3,687
2022	42,063	6,298	4,911	4,720	-	3,322	2,189	3,634
2013→2022の変化	97.7%	112.7%	106.5%	-	-	152.1%	106.4%	109.5%
2019→2022の変化	95.0%	103.0%	99.0%	98.7%	-	107.9%	94.8%	100.2%

*イギリスは、2020年よりスクリーン数及び映画館数の算出方法を変更、新しい算出方法では2016年以降の数値のみ公表している。ここでは、スクリーン数の10年間の比較ができるよう、2019年までの旧式の算出方法によるデータも併記している。

fig.20
諸外国との比較
[映画館数]
(2018-2022)

	フランス	ドイツ	イギリス*	韓国	オーストラリア	日本
2018	2,040	1,672	1,061	483	520	584
2019	2,045	1,734	1,080	513	524	593
2020	2,041	1,728	985	474	472	595
2021	2,028	1,723	928	542	501	596
2022	2,061	1,730	-	561	406	590
2018→2022の変化	101.0%	103.5%	-	116.1%	78.1%	101.0%
2019→2022の変化	100.8%	99.8%	-	109.4%	77.5%	99.5%

fig.21
諸外国との比較
[1スクリーン当たりの人口]
(2022)

	アメリカ・カナダ	フランス	ドイツ	イギリス*	韓国	オーストラリア	日本
人口(千人)	372,217	65,627	84,080	60,238	51,745	25,418	125,682
スクリーン数	42,063	6,298	4,911	4,720	3,322	2,189	3,634
人口/スクリーン	8,849	10,420	17,121	-	15,576	11,612	34,585

興行収入/入場料金

コロナ禍の2020年、2021年と興行収入1位となった中国は、2022年に失速した。他国が徐々に“withコロナ”に切り替えていった一方で中国では“ゼロコロナ対策”が継続されたために、映画館の閉館が続き、壊滅的な影響を受けた。しかし、2023年には緩やかに持ち直しつつある。日本は、興行収入では中国、アメリカ・カナダについて第3位の位置を保持し続けている。

注目すべきなのは、いずれの国においても平均入場料金が2020年以降、かなり上がっているという点である。物価の上昇が入場料金にも反映していると見ることができるが、コロナ禍で、それまで観客層の中心であった高齢者層の観客が減少し、シニア割引の割合が減っていることもその一因となっているかもしれな

い。日本の入場料金は平均1402円で2021年と比較すると少し下がっている。諸外国の入場料金は、USドルまたはユーロで発表された数値に2022年秋頃の為替レートで換算して円で表示している。この1年で円安が急速に進んでおり、現在では日本と欧米の映画館の入場料金はあまり変わらないものになっている。他国に比較して「高い」と言われ続けてきた日本の入場料金が他国より安いものとなる日が近づいているのかもしれない。

→ fig.23 (入場料金・興行収入(2022))

1スクリーン当たりの観客数・興行収入

1年間の観客数をスクリーン数で割った1スクリーン当たりの観客数をみると、いずれの国もコロナ以前の10年前と比較するとかなり低くなっている。日本は、2020年には28,928人と前

年2019年の54%まで下がったが2022年には41,829人にまで回復、2013年の46,763人にかかなり近い数値となっている。アメリカ・カナダは17,001人で日本の半分以下である。

2022年の1スクリーン当たりの1年間の興行収入をみると、日本は約5854万円とトップの数値を示している。他の国に比較してスクリーン数が少なく、入場料金が高いことが1スクリーン当たりの観客数や興行収入の高さの背景にある。2022年、欧米の映画館の1スクリーン当たりの興行収入は、アメリカ・カナダが2529万円、フランスは2392万円、ドイツは2028万円と日本の半分にも満たない。

→ fig.22, 23

fig.22

諸外国との比較

[1スクリーン当たりの観客数] (2013-2022)

	アメリカ・カナダ	フランス	ドイツ	イギリス*	イギリス(旧)	韓国	オーストラリア	日本
2013	31,123	34,664	28,134	-	42,798	97,688	39,864	46,763
2014	29,268	37,029	26,245	-	40,292	94,283	38,511	46,340
2015	30,493	35,778	29,668	-	42,486	89,641	43,413	46,877
2016	30,478	36,494	25,554	38,895	40,554	84,280	43,046	47,937
2017	28,506	35,413	25,463	37,810	40,009	79,490	38,462	51,045
2018	29,560	33,629	21,736	38,147	40,783	73,677	39,421	48,589
2019	28,002	34,871	23,906	36,826	39,308	73,621	36,667	46,653
2020	5,441	10,658	7,734	9,398	-	19,741	12,584	53,123
2021	10,768	15,421	8,538	16,052	-	18,601	17,336	31,141
2022	17,001	24,135	15,883	24,788	-	33,957	26,450	41,829

fig.23

諸外国との比較

[入場料金・興行収入] (2022)

	平均入場料金(円)	興行収入(百万円)	観客数(百万人)	スクリーン数	1スクリーン当たり 興行収入(万円)
アメリカ・カナダ	1,376	986,430	715.1	39,007	2,529
中国	825	585,570	712.0	82,248	712
イギリス	1,245	146,432	117.3	4,720	3,102
フランス	1,022	150,650	152.0	6,298	2,392
インド	197	176,850	892.0	9,423	1,877
韓国	1,048	117,926	112.8	3,322	3,550
ドイツ	1,321	99,599	78.0	4,911	2,028
オーストラリア	1,585	92,106	57.9	2,278	4,043
日本	1,402	213,111	152.0	3,634	5,864

観客数及びスクリーン数：『世界主要各国映画諸統計』（「映画年鑑2023」）参照

興行収入：『世界主要各国映画諸統計』において、興行収入は米ドルで記載されている。

2022年の日本の興行収入2131億円=163000万USD)から米ドルとの為替レートを計算、そのレート(1USD=約131円)で各国の興行収入(円)を計算している。

平均入場料金：ユーロ、またはUSDで発表された数値に、2022年秋頃の為替レート、1ユーロ=142円、1USD=131円で換算している。

1スクリーン当たり興行収入興行収入をスクリーン数で割った数値

※中国とインドについては、2022年のスクリーン数を確認することができなかったため、2021年のスクリーン数を採用している。

シネマ・コンプレックスの割合

フランス、韓国ともコロナ禍で収入が減少しているにもかかわらず、映画館数やスクリーン数に大きな変化はみられなかった。日本は2021-2022年に微減したが、フランス、韓国は少しずつ増えている。

シネコンの割合が高いのは韓国で、全3322スクリーン中3120スクリーン、約94%をシネコンが占めている。日本のシネコンのシェアも88.8%と高い数値を示している。フランスは、シネコンの比率は44.6%にとどまっており、映画館数では、シネコン247館に対し、シネコン以外の映画館が1814館と、シネコンを大きく上回っている。(フランスはシネコンの定義を「8スクリーン以上」としており、他国が「5-7スクリーン以上」としていることと異なる) そのうち、約1300館はシネコンとは異なる多様な映画を上映する「アー・エ・エセイ映画館」(アートハウス、日本のミニシアターに近い)に認定されており、国や自治体から助成金を得ている。また、フランスの映画館数は2061館と日本の562館の3倍以上の映画館があり、人口1-2万人の中小の市町村の73%に映画館がある。身近な場所で多様な映画を見ることができ環境が保持されている

→ fig.24, 25

fig.24

諸外国との比較[シネマコンプレックスの割合 スクリーン数](2018-2022)

		2018	2019	2020	2021	2022
フランス	スクリーン数	5,983	6,114	6,127	6,193	6,298
	うちシネコン	2,582	2,666	2,677	2,752	2,812
	割合	43.2%	43.6%	43.7%	44.4%	44.6%
韓国	スクリーン数	2,937	3,079	3,015	3,254	3,322
	うちシネコン	2,756	2,885	2,908	3,060	3,120
	割合	93.8%	93.7%	96.5%	94.0%	93.9%
日本	スクリーン数	3,570	3,627	3,672	3,688	3,634
	うちシネコン	3,154	3,197	3,238	3,249	3,228
	割合	88.3%	88.1%	88.2%	88.1%	88.8%

fig.25

諸外国との比較[シネマコンプレックスの割合 映画館数](2021, 2022)

	2021			2022		
	シネコン	シネコン以外	合計	シネコン	シネコン以外	合計
フランス	240	1,788	2,028	247	1,814	2,061
韓国	440	102	542	452	109	561
日本	360	236	596	359	231	590

シネマコンプレックスの定義…

フランス 8スクリーン以上の劇場

日本 5スクリーン以上の映画上映専門施設

韓国 CJ CGV、ロッテシネマ、メガボックス、シネQのチェーンによる映画館に加え、7スクリーン以上を持つ映画館

公開本数

2020年、フランス、ドイツ、オーストラリアが公開本数を前年の半分程度に減らしたが、2021年には各国ともコロナ前の60-70%まで回復、2022年にはコロナ前の2018年とほぼ変わらない作品を公開している。しかし、1本当たりの観客数は、10年前にはまだまだ及ばない低い数値に留まっている。特に、公開本数が1643本と非常に多い韓国では1本当たりの観客数が平均68,658人と厳しい数値を示している。

日本では、2019年、自国映画/外国映画の割合は、公開本数、興行収入とも5.4:4.6と、他国に比べて非常にバランスの取れた状態であった。ハリウッド映画への依存度が他国に比べて低かったため、コロナ禍でハリウッド映画の多くが公開延期となった影響も比較的強く抑えられたといえる。しかしコロナ後、興行収入のバランスは大きく崩れ、2020年は日本映画76.3%、外国映画23.7%となり、2022年には69.0%、31.0%とその差が広が

ったままととなっている。

→ fig.26

映画館に対する恒常的な支援制度

日本以外のいずれの国にも、映画産業と映画文化を統括し振興する組織(フランスのCNC、イギリスのBFI、ドイツのFFA、韓国のKOFICなど)があり、製作・配給・興行(上映)・教育・保存、放映や配信にいたるまで、映画に関わるあらゆることに関与している。上映活動についても、シネコンのような商業的な大規模映画館での上映から、多様な映画を上映するミニシアターやシネマテーク、自主上映まで、様々なレベル、種類の上映活動を支援する制度が確立している。

公的な支援、振興策には、単に金銭的な支援という以上の意味がある。公的な支援を受ける映画館には、公共的な文化施設として、地域コミュニティや文化団体との連携を重視したプログラム作りや若年層の観客開拓、映画教育プログラムなど人材育成に関わる多様

な活動を行うこと、そのような活動を行うスタッフを育成することも求められる。そのことにより、地域における文化的な存在感、持続可能性も高くなる。コロナ禍のような緊急事態に際しても、諸外国において、映画館や上映者を守るための対策を行ったのはCNCやBFI、KOFICといった映画を統括する組織である。ほとんど公的な支援を受けずに、130館をこえるミニシアターが、大都市のみならず中小都市にも存在し、運営されている日本の状況は、諸外国から見ると「miracle (奇跡)」なのである。しかし、奇跡は永遠に続くものではない。この20年間で映画館は約300館減っており、映画館のない市町村、映画館空白地域が広がり続けている。関係者の献身と犠牲によって成立してきた小規模な映画館の運営は限界に近づいていると言わざるを得ない。映画振興策の見直し、映画館支援、上映者の実態に対応した助成プログラムの実現が待望されている。

fig.26 諸外国との比較「公開本数」(2013-2022)

		2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022		
												自国映画	外国映画
フランス	公開本数	654	663	652	716	693	683	746	365	455	681	411	270
	観客数(千人)	193,700	209,100	205,400	213,200	209,400	201,200	213,200	65,300	95,500	152,000	60%	40%
	1本あたり入場者数	296,177	315,385	315,031	297,765	302,165	294,583	285,791	178,904	209,890	223,201	41%	59%
ドイツ	公開本数	563	570	596	610	587	576	606	339	429	554	237	317
	観客数(千人)	129,700	121,700	139,200	121,100	122,300	105,400	118,600	38,100	42,100	78,000	43%	57%
	1本あたり入場者数	230,373	213,509	233,557	198,525	208,348	182,986	195,710	112,389	98,135	140,794	27%	73%
イギリス	公開本数	698	712	759	821	760	787	754	381	498	703	220	483
	観客数(千人)	165,500	157,500	171,900	168,300	170,600	177,000	176,100	44,000	74,000	117,300	31%	69%
	1本あたり入場者数	237,106	221,208	226,482	204,994	224,474	224,905	233,554	115,486	148,594	166,856	30.1%*	69.9%*
韓国	公開本数	905	1,095	1,176	1,520	1,621	1,646	1,740	1,693	1,637	1,643	703	940
	観客数(千人)	213,350	215,060	217,290	217,020	219,870	216,390	226,680	59,520	60,530	112,805	43%	57%
	1本あたり入場者数	235,746	196,402	184,770	142,776	135,638	131,464	130,276	35,157	36,976	68,658	56%	44%
オーストラリア	公開本数	421	508	540	611	697	758	754	401	457	715	80	635
	観客数(千人)	82,000	78,600	90,300	91,300	85,000	89,800	84,700	28,200	39,700	57,900	11%	89%
	1本あたり入場者数	194,774	154,724	167,222	149,427	121,951	118,470	112,334	70,324	86,871	80,979	5%*	95%*
日本	公開本数	1,117	1,184	1,136	1,149	1,187	1,192	1,278	1,017	959	1,143	634	509
	観客数(千人)	155,888	161,116	166,630	180,189	174,483	169,210	194,910	106,137	114,818	152,005	55%	45%
	1本あたり入場者数	139,560	136,078	146,681	156,822	146,995	141,955	152,512	104,363	119,727	132,988	69%*	31%*

*観客数のシェアではなく興行収入のシェア